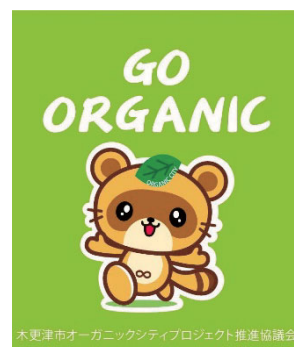


木更津市オーガニックシティ フェスティバル 2016 レポート



オーガニックは地域をポジティブにする。

特集1 オーガニックなまちづくりフォーラム

特集2 ALGOAフォーラム in Kisarazu

イベントピックアップ 木更津にゆかりのあるキャラが大集合！？「木更津ゆかりのキャラ調印式」

開催日時：平成28年11月16日（水）、17日（木）

会場：かずさアカデミアホール

（千葉県木更津市かずさ鎌足2-3-9）

主催：木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会

目 次

1 はじめに

2 オーガニックなまちづくりとは

- ①木更津市の紹介
- ②“オーガニックなまちづくり”とは何か
- ③フェスティバルの開催趣旨について

4 レポート～2日間を振り返って～

6 イベントピックアップ

- ①講演「学校給食を通じた食からの環境づくり」
- ②トークイベント「オーガニックアクション！～市民活動のこれから～」
- ③市民活動パネル展
- ④セミナー「多様なライフスタイルがかなう“Uターン・起業”セミナー」
- ⑤木更津にゆかりのあるキャラが大集合！？「木更津ゆかりのキャラ調印式」
- ⑥ママの笑顔と happy が広がるように！「ココカラおやかフェ」

13 **特集1** オーガニックなまちづくりフォーラム

- ①プレゼンテーション「オーガニックなまちづくりについて」
- ②キックオフトークセッション「未来へつなぐために」

18 **特集2** ALGOAフォーラム in Kisarazu

- ①特別講演「有機農業と非木材利用製品を支えるコミュニティー」
- ②基調講演「世界を引率するアジア」
- ③アジア各国から地方自治体の「先進事例発表」
- ④アジア各国のサステナブルな取組紹介「リレートーク」
- ⑤パネルディスカッション
～持続可能な未来へ、イノベーションが始まる地方自治体ネットワークの可能性と役割～
- ⑥「木更津オーガニックシティフェスティバル宣言」

23 あとがき

「木更津市オーガニックシティフェスティバル2016」を終えて
木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会 会長 渡辺 芳邦（木更津市長）

24 協賛団体・後援・協力・協賛品一覧

25 木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会構成

はじめに



地域の強みを活かしてまちの魅力を高め、次の世代に引き継いでいくため、市民・団体・企業等の力を結集する旗印として掲げた「オーガニック」、このまちづくりのキックオフイベント「木更津市オーガニックシティフェスティバル 2016」を平成 28 年 11 月 16 日・17 日に開催しました。

幸いにも、2 日間とも好天に恵まれ、延べ 3,400 人の来場者で賑わいました。

16 日は、メインフォーラムでは、「オーガニックなまちづくりとは何か？」を題材にしたプレゼンテーションやトークセッションを開催するとともに、市、各種団体が取り組んでいるオーガニックな取組に関する講演、セミナー、展示、ワークショップなど 30 を超えるイベントを開催しました。

また、有機食材や木更津の食を中心としたフードコーナーでは 30 店舗の出店があり、多くの来場者に「オーガニックなまちづくり」を体感していただくことができたのではないかと思います。

17 日は、農によるオーガニックなまちづくりをテーマに「ALGOA フォーラム in Kisarazu」を開催し、アジア 9 カ国から海外ゲストをお招きし、有機農業でまちづくりに取り組む地方自治体の先進事例を学び、地方自治体の連携で築く持続可能な未来について、パネルディスカッションを行いました。

キックオフイベントということで手探りのところもたくさんあり、皆さまには多大なるご迷惑をおかけしたと思いますが、木更津の未来を創る第一歩が踏み出せたのではないかと感じました。

当日ご協力いただいた皆さま、来場していただいた皆さま、本フェスティバルに携わっていただいた全ての皆さまに、この場をお借りしまして御礼申し上げます。

今後も、オーガニックシティ木更津をどうぞよろしく願いいたします。

木更津市オーガニックシティフェスティバル 2016 主催
木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会 事務局



①木更津市の紹介

木更津市は、東京湾最大の自然干潟である盤洲干潟や万葉集に歌われた馬来田の峰が所在する上総丘陵を有するなど、海と山に囲まれた自然豊かなまちです。海苔やアサリをはじめとした海産物や、梨やブルーベリー等の農産物などおいしい特産物が豊富にあります。また、菅生遺跡や金の鈴が出土した金鈴塚古墳等の存在から、原始、古代より重要な地域として栄えたことがうかがえ、近世からは木更津船を通じた江戸との交流により港町として繁栄し、歌舞伎「与話情浮名横櫛」の舞台となるなど、江戸前独特の気風が育まれてきた、歴史、文化のあるまちです。近年は、東京湾アクアライン等の広域的な幹線道路網の整備進展に伴い交通利便性が向上し、多様な都市機能が充実する中で、大型商業施設等が集積するとともに、定住・交流の人口が増加するなど、まちの活力が高まっています。



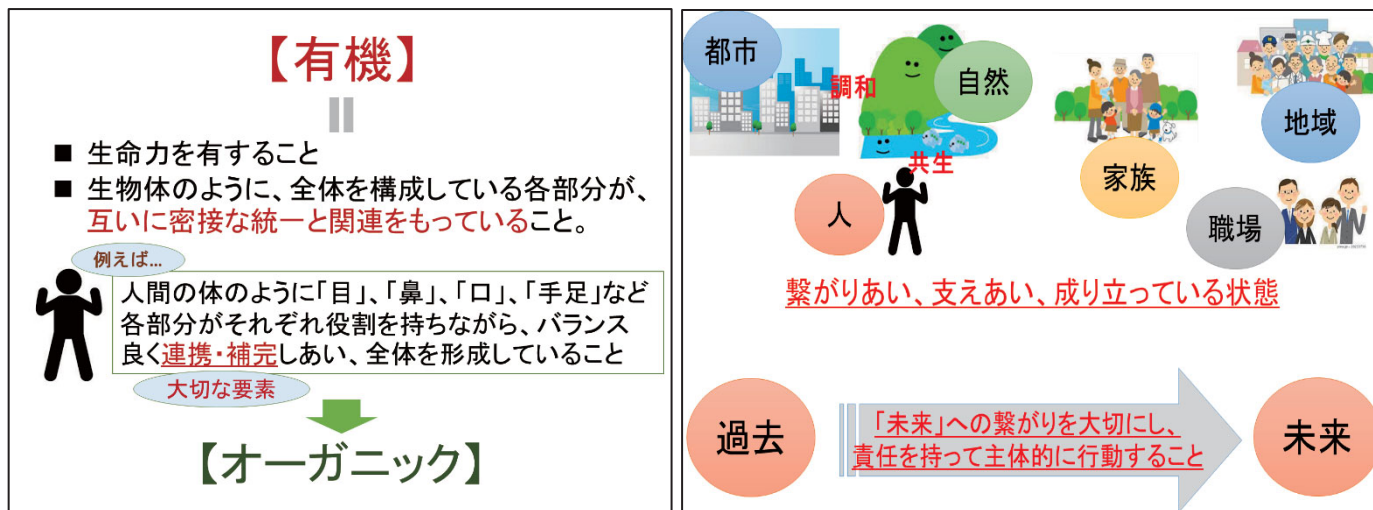
①市位置図
②里山と子供たち
③東京湾アクアライン
④ブルーベリー狩り
⑤潮干狩

② “オーガニックなまちづくり”とは何か

わが国は、少子高齢化が急速に進行するとともに、本格的な人口減少社会が到来するなど社会潮流が大きく変化しており、経済成長の鈍化や環境問題の深刻化等とあわせ、地方自治体は持続可能なまちづくりへの転換が求められています。現在人口が増加している木更津市についても例外ではありません。

近い将来には、木更津市も人口減少を迎えることが予測されている中、これら木更津市の強みを活かしてまちの魅力を高め、次の世代に責任をもって引き継いでいくためには、行政のみならず、地域一体となって取り組むことが求められています。そこで、市民・団体・企業等の力を結集するための旗印として、「オーガニック」があります。

「オーガニック(organic)」は「有機」「有機的な」と訳され、人間の体のように、目、鼻、口、手足など、各部分がそれぞれ役割を持ちながら、バランス良く連携・補完しあい、全体を形成している様子を意味します。これを「まち」に例えると、豊かな自然や独自の伝統文化など、多様性を持つ木更津市において、「自然と都市機能が調和していること」、「家族、職場、地域等で人々が繋がっていること」など、それぞれが自立しながら、補い合い、支え合い、成り立っている状態です。そして、オーガニックは時間軸で過去から未来への繋がりを大切にしながら、責任を持って、現在のまちづくりを進めていくことでもあります。

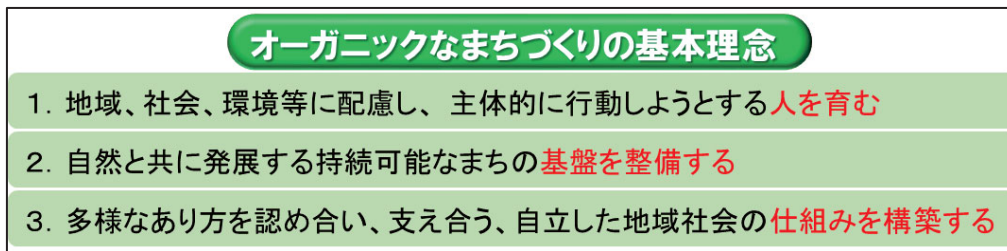
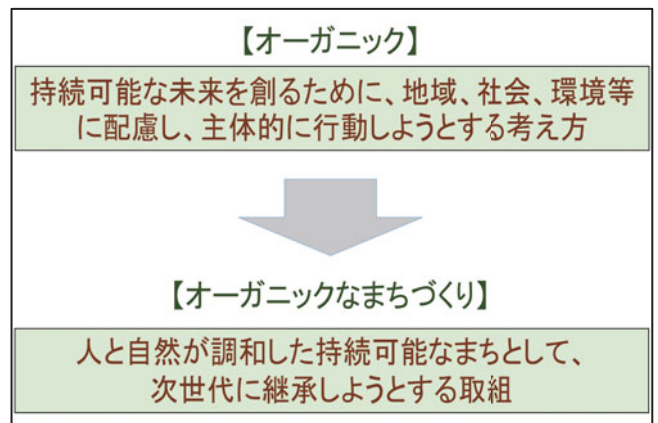


有機とは？

まちに例えると？

木更津市では、「木更津市まち・ひと・しごと創生総合戦略(平成28年3月策定)」において、地方創生に向けた新たな視点として「オーガニックなまちづくり」を位置付けました。そして、「オーガニック」を、「地域や社会、環境等に配慮し、主体的に行動しようとする考え方」と捉え、「このオーガニックをまちづくりの視点として、人と自然が調和した持続可能なまちとして、次世代に継承しようとする取組」である「オーガニックなまちづくり」を推進するため、平成28年12月15日に「木更津市 人と自然が調和した持続可能なまちづくりの推進に関する条例(通称:オーガニックなまちづくり条例)」を施行し、新たなまちづくりに向けての一步を踏み出しました。

木更津市での定義付け



③フェスティバルの開催趣旨について

本フェスティバルは、以下の目的達成のために、市民をはじめ、木更津市に関わる企業、教育機関、メディア、各種団体及び行政等が一堂に会する日本初のオーガニックシティに向けたキックオフイベントとして開催しました。

＜開催目的＞

- 木更津市で行われているオーガニックなまちづくりの取組を各方面へ普及・啓発することで、まちづくりへの理解や参加促進を図ります。
- 参加者と来場者の交流により、地域社会・経済活性化など、新たな価値を創造します。





11月16日(水)



オーガニックなまちづくりフォーラム (メインホール) P13
第1部 (10:00~11:00)

(敬称略)

「多様なライフスタイルがかなう“Uターン・起業”セミナー」 (106 会議室) P10

第1回 午前の部 イルマリオロ 伊藤夫妻 (11:00~12:00)

第2回 午後の部 マンモスいちご園 石井夫妻 (14:00~15:00)

盤洲干潟の自然環境保全活動 (1F ホワイエ)

会場コンサート (1F ロビー) (11:00~12:30)

JETRO 産業セミナー (201B 会議室) (11:15~12:15)

赤十字奉仕団活動PR (2F ホワイエ)

木更津市鎌足桜保存会の活動紹介 (2F ホワイエ)

きさらづの里山を知ろう! (2F ホワイエ)

図書館オーガニックコレクション (2F ホワイエ)

「木更津ゆかりのキャラ調印式」 (1F ロビー) P12

グリーティング: 11:30~13:20

調印式: 13:45~14:45

市長との撮影会: 15:15~15:25

木更津市マスコットキャラクター「きさポン」スタンプラリー

市民活動パネル展 (202A 会議室、2F ホワイエ) P9

ナチュラルコスメ講座

(メインホール前ホワイエ)

1回目: 11:15~12:00

2回目: 15:15~16:00



木と紙のワークショップ (101 会議室)

フードコーナー



ALGOAフォーラム in Kisarazu P18

11月17日(木)

特別講演 (9:50~10:20)

インドネシア共和国 環境林業省 Ilyas Asaad 大臣顧問

基調講演 (10:20~11:00)

IFOAM アジア Zhou Zejiang 理事長 (中国)



アジアの各国から地方自治体の先進事例発表 (11:00~12:00)

1. 韓国 洪城郡有機農業の現状と課題 (Jung Manchul)

2. 貧困を乗り越えるオーガニックコミュニティ

(ドミンガ市長 (フィリピン) Mark Villarin Pacalioga)

3. インドビオファーム 暮らしと開発が調和する新しいモデル (Manoj Kumar Menon)

4. 2020年、100%オーガニックを目指して (タシヤンチェ県 (ブータン) Thuji Tshering)

5. 埼玉県小川町 下里地区の取組～地域と支え合う美しい村～ (霧里農場 金子友子、石川宗郎)

6. 木更津市 農によるオーガニックなまちづくり (木更津市経済部長 鎌田哲也)



第3次健康きさらづ21 (2F ホワイエ)
木更津市景観写真展 (2F ホワイエ)
ちばアクアラインマラソン 2016 展示 (2F ホワイエ)

就農相談会 (103 会議室)
農業ヒーローズ～日々の勇姿とその青果～ (103 会議室)



第13回子どもまつりプレイベント (202B 会議室)
オーガニックリゾート～少年自然の家キャンプ場のPR～ (202B 会議室)

オーガニック&公民館サロンカフェ (105 会議室)

保育スペース

「学校給食を通じた食からの環境づくり」 (102 会議室) P6
講演会 (13:50～15:30)



クリーンなエネルギーとしての小水力発電 (104 会議室)
未来の理想都市“キサラツ” (104 会議室)
資源と環境を守り、障害者の自立を～まちは鉱山である～ (104 会議室)

認知症に関する講演会 (201B 会議室) (14:00～15:30)

「オーガニックアクション!～市民活動のこれから～」
(201A 会議室) (13:30～15:00) P8

オーガニックなまちづくりフォーラム (メインホール) P14
第2部 キックオフトークセッション (15:30～16:30)

ココカラおやこカフェ (202A 会議室) P12

オーガニックでやさしい市税の制度説明会 (107 会議室)
「税を考えよう」 (107 会議室)
就労体験「ぷれジョブ」の紹介～未来の地域をつくるなかま～ (107 会議室)
あけぼの園のアイデア商品の紹介と販売 (107 会議室)



パネルディスカッション ～持続可能な未来へ、イノベーションが始まる地方自治体ネットワークの可能性と役割～ (15:15～16:50)

【パネラー】

1. インドネシア共和国 環境林業省 調査研究部
Maman Turjaman
2. ドミンガ市長 (フィリピン)
Mark Villarín Pacalioga
3. 一般社団法人オーガニックヴィレッジジャパン
山口 タカ
4. オーガニック・エコ農と食のネットワーク (NOAF)
西辻 一真
5. 千葉県いすみ市農林課 主査 鮫田 晋

【ファシリテーター】

木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会 会長 渡辺 芳邦
(木更津市長)

アジア各国のサステイナブルな取組紹介
(14:00～15:00)

1. モンゴル Onon Deriilaamyatav
2. スリランカ Presad Rathnayake
3. 中国 He Yongqing
4. バングラデシュ Tanveer Hossain
5. インドネシア ボゴール市長
Bima Arya Sugiarto



木更津オーガニックシティフェスティバル宣言 (16:50～16:55)
千葉県立木更津高等学校2年 奥野巧、佐生浩季

①講演「学校給食を通じた食からの環境づくり」

講師 食環境ジャーナリスト 金丸弘美氏



食環境ジャーナリストの金丸弘美氏をお招きし、学校給食を通じた食からの環境づくりについて、ご講演いただきました。



学校給食の目的の変化 子どもの健康に投資することが重要

学校給食は、栄養不足の解消や、ご飯を満足に食べられない子どもたちがいなくなることを当初の目的として始まりましたが、現在は、肥満・糖尿病など生活習慣病の予防、健康管理、地域の食を知るというように目的が大きく変化しております。

学校給食を効果的に推進するため

農林水産省の会議で私 まず委員としてお願いをしたのは、保健部署、教育委員会などが連携して健康調査

や子ども達の生活リズムなどのデータを公開し、給食の位置づけを明確にすることにしました。

自治体では、様々なデータを各部署で取扱っています。が、部署別になっているために統合されておりません。データの多くは公開されていませんが、全体を通して地域を観るという視点が大切になります。学校給食を効果的に推進するためには、データと現場検証を一緒にしなければなりません。

子どもの健康に投資することが「オーガニック」であり、私たちの未来を創ることとなる

現在は小学校低学年でも肥満、野菜不足、夜更かし、運動不足などから、生活習慣病の予備軍が生まれております。給食は年間二百食程度、三六五日の食事を考えると、五分の一にしかありません。このことから、子どもの健康は給食だけでは作ることができないことがわかりました。

したがって、学校だけでなく家庭においても、食が確実

に健康と教育向上において繋がるという視点、それを根拠づけるデータ、これに基づく計画的な組立、そして食事への展開が必要になります。

そのためには、学校、家庭及び地域が一体となったワークシヨップを行い、方向性を見出していくのが望ましいと考えます。

また、私がテーマ設定として必ずお願いするのは、「健康な未来を子どもたちに手渡すこと」であります。親ならば誰もが子どもが健やかに育ち、明るくあつてほしいと願っていることでしょう。

子どもたちは、これからの未来を創っていく大きな宝であります。私たち大人は、未来の夢を語らなければなりません。

木更津市は、「オーガニックなまちづくり」を指すことですが、私は子どもたちに投資することが「オーガニック」であると考えます。

「おいしさ」の表現が豊かになるワークシヨップ

私は、参加型の食の講座に地域特性を活かしたいというところで、二〇〇六年から二年間にわたって大分県の食育推進事業のアドバイザーとして呼ばれ、そこで試み始めたのが、地域の農家、漁業者、料理家、行政などが一緒に食材の背景や歴史などを学び、実際に料理を食べるという形式の講座でありました。

この大分県での試みに手ごたえを感じた後、こうしたワークシヨップを各地で試みるようになりました。

長崎県の平戸市では、ワークシヨップを通じて地元の料理人と漁師が知り合い、その縁で「素材から紹介する料理会」を開催し、お客さんに喜ばれました。

大分県佐伯市では、旬の素材を使用したおにぎりを作るというワークシヨップを開催し、地元のおいしい食材がお母さん達に伝わり、地元の食材の購入促進に繋がることがありました。

ワークシヨップにプロの料理人が加わることにより、ちょっとしたアレンジで素材の旨みがぐんと増すこと



会場では、金丸氏の講演とともに木更津市が取り組んでいる鎌足小中学校の給食プロジェクトについて、展示を行いました。

を学ぶことができ、ひとつの素材で、おいしさを様々な表現できるようにあります。

したがって、ワークシヨップの効果として大きいのは、「おいしさ」の表現が豊かになるということと考えます。

子どもたちは「食」を通して、日ごろから見る、嗅ぐ、味わうという体験をしています。しかも、酸味、苦味、塩味、甘味、旨みと微妙な味までを五感を使って感じ取ることが出来ます。「食」は子どもたちの豊かな表現力を引き出すという大切な働きがあり、おいしさが喜びや楽しさに変わります。

時に子どもたちは、大人では考えられない表現で応えてくれることがあります。

佐賀県の小学校では、地元のお米を「おばあちゃんの贈り物のような味がする」と表現した子どもがいました。

大分県の幼稚園児がリンゴを嗅いで「幸せの香りがする」などと大人では思いつかないことを言って教室を沸かせたこともありました。

食のテキストを作成し、発信せよ

食育を行うために、まずは、地域の食品一つひとつの素材の背景、材料、加工法、作り手、味、流通などについて、一度きちんと調べる必要があります。

大量生産の物と手作りの物の違い、他の地域の同じ素材であっても、味比べをしてみると違いが誰にでも簡単にわかるはずです。

それをわかりやすく伝えられるようにするため、地域の食材の特色をまとめた「食のテキスト」を作成することが効果的だと思っております。

テキストによって地元の人でも知らなかったことが、次々に明らかになり、もちろん消費者の意識も変わります。

質の高い本物とはなにかを理解し、品質の良い物を選択し、体に良い物を購入してもらうことができます。また、外部に向けて有効な発信ツールとなるだけでなく、作るプロセスにおいて作り手自身も再発見する学習効果があります。

この「食のテキスト」を作成するためには、次のとおり準備

する必要があります。

- ・わかりやすい各地の取組の事例や事例写真などの資料を準備しておく。

- ・地域の食材に何があり、どんな味かを知ること。

- ・食材の歴史的背景、栽培法、加工法及び料理法まで知ること。

- ・栄養士も食材の現場に足を運ぶこと。

- ・食からの環境づくりのために県・市の担当者も農家、栄養士、教育委員会、学校と一緒に取り組むこと。

- ・親の食育が必要。

- ・親に理解してもらえらるための場を作ることが必要。

こうした準備を踏まえて、一度しっかりとったテキストを作っておけば、そこから体験型観光、ワークシヨップへの発展が非常にスムーズに行えます。学校の食育や、地域の食を取り入れての観光事業をする場合、テキストを用意し、生産者や料理家に参加していただければ、素材の持ち味から食べ方、地域の文化や新しい料理の展開まで、誰にでもわかりやすく伝えることができます。それによ

って地域の個性を明確に打ち出すことができます。

まとめ

私にとって「オーガニック」とは食を通じて、子どもたちに投資することであり、「食のテキスト」を活用し、ワークシヨップを開催することで、学校・家庭・行政・農家等が力を合わせ、地域一体となって食育の推進に取り組むことが重要だと考えております。

●金丸 弘美 氏

食環境ジャーナリスト。

総務省地域力創造アドバイザー、
内閣官房地域活性化応援隊地域
活性化伝道師など幅広く活躍している。





② トークイベント 「オーガニックアクション！ ～市民活動のこれから～」



人の意識が豊かになっていくことにより、人と人との繋がりが生まれ、地域が活性化し、木更津市全体が今よりも住み良いまちになる。
木更津市で活躍する市民活動団体の事例を紹介するとともに、これからの市民活動、木更津市について、5人のパネラーがクロストークを行いました。



パネラー 右側から

・木更津市副市長 久良知 篤史

・木更津市長 渡辺 芳邦

・(株)studio-1代表 山崎 亮氏

・特定非営利活動法人一粒舎

金井 太一氏

・市民支援薬剤師連絡会PIG

齋藤 武氏

事例紹介

特定非営利活動法人一粒舎の運営方針は「地域とともに生き、地域に貢献する」であり、「自然がいっぱい」「笑顔がいっぱい」「楽しい計画がいっぱい」を掲げて活動しています。

木更津市協働のまちづくり支援金を活用し、馬来田地区における里山の再生を行っており、また、ブルーベリー園「のらりくらり」の経営と、就労継続支援B型の事業所として、障害者の支援も行っているため、経営と環境保全、地域社会への貢献、さらには行政と地域の官民一体となった取組を体現しています。

市民支援薬剤師連絡会PIGは薬剤師の広報や相談活動等を行っている団体です。今回は団体が推進している「ふるさと木更津ブルーベリー構想」について語っていただきました。

コンセプトは「木更津のブルーベリーで千葉の小中学生の目や心身の健康を守りたい」であり、木更津のブルーベリーを地域ブランド化し、学校給食に取り入れるこ

とで、地域農業の活性化を図り、かつ小中学生の視力回復の一助となり、精神的にも安定し得る薬剤師ならではの発想を取り入れたプロジェクトとなっています。

クロストーク

地域の課題を地域の人が解決するためのコミュニケーションデザインに携わっている、山崎氏をお招きし、これからの市民活動について語り合っていました。

(敬称略)

山崎 木更津市ですごいなと思いました。やりたいと思ってもできないことってやはりあります。それは金銭的な観点からだったりするのでですけど、行政からの支援があると、とても助かります。

それに全てを行政がやるのではなく、市民と一緒に進めたほうが良いプロジェクトもあります。

自分たちの地域を良くしようとする取組を行政が支援する。これってオーガニックだと思いません。ちなみに齋藤さんと金井さんは何がき

っかけで活動を始めたんですか？

齋藤 お菓子を買っていた少年が、これが晩御飯だと言ってたんです。それがすごいショックで自分にも何かできないかなって思ったのがきっかけでした。

金井 最初は竹が生い茂っていること、ゴミが捨てられていたことが気になって始めました。そこから波及していつ、今では里山の保全というかたちになっています。

山崎 とても自然な流れですよ。これやったほうが良いな。そう思ったことを自然にやっていく。そういう発想って、経済的で、迅速に、金儲けだ！というところからは絶対出てこないんです。市長、副市長はどうですか？

副市長 市民活動ってこんなに高いレベルのものができるんだなって思いました。これからは市民活動団体が表舞台でもっと活躍していただいて行政がそれを支える。

それで木更津がさらに良くなっていく。これが本当に実現できるんじゃないか。そ



会場の様子

う感じました。

市長 今の時代は、物の豊かさから心の豊かさに変わってきたと、そう言いながらも何十年もたってききました。ただ、なかなか変わらないのが現状で・・・

心の豊かさってどう楽しんでいくかだと思っんです。それは市民活動もボランティアも一緒に、行政は市民の声を聴いてサポートする。そして実現しやすい環境を整えるのが行政の仕事だと思っんです。官とか民ではなく、みんなで一緒にまちの活性化をしていければと思っています。

●齋藤 武氏

市民支援薬剤師連絡会PIG所属。
困っている市民の皆さまのために活動しようという意識を持ち、薬剤師の広報、相談活動、多職種との連携を行っている。

●金井 太一氏

特定非営利活動法人一粒舎 所属。
障がいのある方などが地域で安定した自立生活を維持していける社会基盤を作る。ブルーベリー園の運営や里山の保全など、農業、環境といった視点の取組を行う。

●山崎 亮氏

(株)studio-L 代表。
地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。



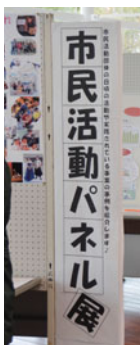
③市民活動パネル展



「木更津をもっと良くしたい！！」

そんな想いで活動している市民活動団体の日頃の活動の紹介を行う場。

フェスティバルを通じて、団体同士又は来場者がつながって欲しいという想いで展示しました。



活動紹介!
パネル展示には十八の市民活動団体が参加し、日頃の活動のアピールや、団体同士、来場されたお客様など新しい仲間を見つける機会となりました。同時に来場されたお客様より「楽しそう」「参加したい」など様々な温かいコメントをいただき、大盛況に終了しました。

市民活動とは?
営利を目的とせず、木更津市における不特定かつ多数のもの利益の増進に寄与することを目的として、自発的又は自主的に行う活動です。木更津には市民活動をしている団体が多く、みなと口に平成二十七年十月にオープンした市民活動支援センターには、五八の団体の登録があり、地域活性化や福祉の増進・子育て支援など様々な分野に取り組んでいます。そんな団体の皆さまの想いはとても熱く、「木更津をもっと良くしたい!」という想いで日頃、活動されています。





④セミナー 「多様なライフスタイルがかなう



“Uターン・起業” セミナー」

Uターン・起業に興味のある若者等を対象に、夢の実現や自分らしいワークスタイルなどを考えるきっかけとして、木更津で夢を叶えた2組のご夫婦によるトークカフェ形式のセミナーを開催しました。地元に戻り起業したきっかけや、起業をして今思うこと、また、オーガニックについての考えを語っていただきました。

伊藤隆志さんご夫婦

高校卒業後、東京のレストランに勤務したのち、イタリアで2年半修行を積んだ。帰国後は新潟で調理学校教師を経て、故郷である木更津に戻り、平成27年9月、イタリアンレストラン「イル マリオール」をオープン。



地元・木更津で起業したきっかけ

高校卒業後、四十歳までには自分のお店を出す決めていましたので、そのために、どのお店で働いて何を学ぶか、選択してきました。場所は、東京で勝負したいという気持ちもありましたし、地元の木更津からアクアラインで通える横浜で勝負したい、その二つが候補でした。すごく悩んでいる中、木更津に戻ってきて、市の職員や、商工会議所の職員の方と話す中で、「木更津をもっと元気にしたいんだよね」という話を聞いたことがきっかけです。自分の原点に戻ってきて、私が先輩方から教わったことを活かしながら、ピザやパスタだけではない、本場にイタリア人が日常で食べているイタリア料理を、まずは木更津から発信し、多くの地元の人に食べてもらいたい、もつとこのまちを元気にしたいと思いました。そのあと、東京に勝負に出るといふこともあるかな、と思い、木更津でお店を出しました。

修行したイタリアの文化や食文化で、オーガニックに通じるもの

私が考えるオーガニックとは、衣・食・住、ライフスタイル全てです。私が住んでいたイタリアの田舎では、自分たちが食べるものは、自分たちで作っています。例えば、日本では、生ハムは買うものですが、イタリアでは、生ハム、サラミも家庭で作って、自宅に吊るしてあります。朝、豚を殺して、血や骨などを全部処理し、再利用できるものは再利用をして、一年分の生ハムを作ります。オリーブの木を育てて、オリーブオイルを作ったり、各家庭の葡萄園で収穫した葡萄でワインを作っています。一年を通して、自分たちが食べるものを作りながら、楽しく生きる、それがオーガニックなのかな、と思っています。木更津は、バランスの良いまちです。都会の文化にすぐ触れることもできるけど、ちよつと中に行けば田舎で、野菜も畜産も卵もあって、オーガニックなまちに木更津の地域性は、とても合っていると思います。

オーガニックシティを掲げる木更津で、食文化を通じて伝えていきたいこと

私のコンセプトは、「本当のイタリアの食文化を知ってもらいたい」ということです。日本には、まだまだ知られていない世界の食べ物がたくさんあります。それを木更津で伝えていきたいです。また、調理学校の教員時代に勉強したのですが、今自分の身体や体調は、十年前に食べたものが作っているんです。ということは、子どもたちの十年後の身体を考えたときに、この飽食の時代に、子どもたちにライフスタイルの中で、自ら良い食材を選択することができるようになって欲しいし、本来の食材そのものおいしさを知ってもらいたい。そのために、私ができることは、この木更津で、子どもたち、若者たちに、これらのことを踏まえながら、食文化を正しく伝えていくことだと思っています。

石井圭祐さんご夫婦

大学卒業後、農業経験が全くないところからいちご農家で研修を重ね、平成28年1月、2人の故郷である木更津で念願の観光いちご園「マンモスいちご園」をオープン。



地元・木更津で起業したきっかけ

私も妻も地元が木更津で、幼い頃に東京湾アクアラインができ、大型商業施設ができてから、木更津を訪れる人がどんどん増えていくのを間近で見ながら、木更津で何かできたらおもしろいんじゃないか、と考えていました。昔から農業に興味があり、アクアラインが見える場所で見えたいと思いいちご園がやりたいと思い、大学卒業後すぐに、いちご農家に弟子入りしました。

開業までの道のり

いちごづくりの修行中は、木更津市役所の農林水産課へ通っていました。私の実家も、妻の実家も農家ではないので、農業をしたいと言うと、だいたい「何言ってるの」という言葉が返ってきます。とにかく顔を覚えてもらい、いかに本気が伝えることに必死でした。そんな中で、私の話に耳を傾けてくれる市の職員の方に出会い、色々なご支援をいただきました。農地が決まってからは、日本政策金融公庫から資金を借り

いちご園のハウスを建てました。いちご園の営業は、私が生産担当で、妻が営業販売担当です。オープン当初、お客様に絶対満足していただく、という自信があったので、あえて宣伝はしませんでした。一人の若い女性が丁寧におもてなしする、そんな今までのないオシャレないちご園を作りたいと思っていて、それには、人当たりが良く、接客が大好きな妻は最適だと思っています。

苦労したことは、土地を借りること

木更津を車で走っていると、空いている田んぼや畑はたくさんあるように感じます。耕作していない場所の持ち主に、うまく話をつけられれば、簡単に土地を借りられるんじゃないかと、思っていました。甘い考えでした。地元の農業委員の方に相談し、一緒にアクアライン付近地域の人たちを訪問し、土地を探しましたが、いちご園のビニールハウスが建てられるだけの面積の土地を、借してくれる方はなかなかいませんでした。私達はいちごを売

ることにしつかりとしたビジョンがありましたので、農地はアクアラインの近く、というのが絶対に譲れない条件でした。諦めかけたときに、農業委員の方が、「うちの田んぼをならして使えよ」と、大きな決断をして土地を貸していただきました。本当に感謝しています。



借りた土地に建てたビニールハウス

木更津は色々な夢を叶えることができるまち

多種多様な意志を持った人がいて、それを受け入れる環境、それがオーガニックだと思えます。私達みたいな生き方も受け入れてくれた木更津。二人だけではないいちご園はできませんでした。反対しただけ最後には背中を押ししてくれた両親、一緒に必死になつてくれた農林水産課の

職員の方、土地を貸してくれた方、ビニールハウスが倒壊したときにお手伝いをしてくれた近所の方々、そして、訪れてくれるお客様。私達の気持ちが強ければ強いほど、周囲の人が支えてくれました。何かやりたい！と強い気持ちを持った人たちがたくさん集まる、そんな木更津市であって欲しいです。

担当者より

各回定員を超える数の方にご参加いただきました。起業を検討している参加者からは「自分のビジョンを再確認し、前向きに取り組んでいくきっかけとなった」などの声をいただきました。

また、二組のご夫婦のさらなる夢の実現を期待する声もたくさんいただきました。やはり、「何かやりたい、こうしたい」と熱意がある人に協力的なのは、木更津の土地柄なのだと思えました。様々な人が、お互いを支え合いながら、自分らしいワークスタイルを実現できる、そんなオーガニックなまち、木更津であり続けたいです。



⑤木更津にゆかりのあるキャラが大集合！？ 「木更津ゆかりのキャラ調印式」



木更津市にゆかりのあるキャラクターが集まり、
今後も木更津市と一緒に盛り上げていくことを決意表明するための調印式を行いました。

参加キャラは、ケーブルテレビのインターネットZAQのキャラクター「ざつくう」、自衛隊千葉地方協力本部の「千葉3兄妹」、東海汽船株式会社の「キャプテンたちばな」、株式会社ヤツルギ魂の「鳳神ヤツルギ」、「天神キサラ」、スパークルシティ木更津のヒーロー「スパークルアクア」、「スパークルファイア」、泉陽興業株式会社の「キサラピアパークキャラクター」（現…キサラまる）、新日



ゆるキャラ大集合！

これからもきさポンと一緒に木更津市を盛り上げましょう！

鉄住金かずさマジックの「マジッキー」、木更津市から「きさポン」、一日限りの復活、「のこった君」。
また、千葉県マスコットキャラクター「チーバくん」も応援に駆けつけてくれました。
地元保育園児や小学生も参加キャラとふれあい、とても嬉しそうでした。
調印式の担当者にお話を伺ったところ、次回もゆるキャラ調印式を開催できるなら、是非二十体は呼びたいとのことでした。



⑥ママの笑顔と happy が広がるように！ 「ココカラおやこカフェ」



ここからきっかけになって、ここからつながって、ここからママの笑顔と happy が広がるように。
「ここから」を合言葉に活動を展開している市民活動団体「勝手に木更津応援団」さんが、ココカラおやこカフェを開催しました。

移住者が増加する木更津市では、引越してきてても知り合いが少なく、孤立する母親の姿が見られました。そのような中、勝手に木更津応援団が、お母さん方に地域に溶け込んでもらうために行っている活動が「ココカラ」です。地域のお母さん方が集まり、ワークシヨップや、雑貨販売、体験セミナー等を行っています。
フェスティバルでは、いつもの「ココカラおやこカフェ」に加えて、ベビーマッサージ、ベビーフォト、ベビードリームアート等の赤ちゃん向けのブースを出展する他、無料託児、キッズスペースの提供を行い、会場のお母さん方は肩の荷をおろし、くつろいでいる様子でした。
遊んでいる子どもたちが友達になり、その母親同士が笑顔で話している姿に人との「繋がり」を感じることができました。
参加者は総勢二百名に及び、イベントは大盛況に終わりました。

●勝手に木更津応援団

「生まれ育った木更津の街を、元気にしたい。」という思いから、誕生した市民活動団体。行動 Action! をミッションに、木更津あかり祭夜灯、ココカラ活動、絵本回収プロジェクトなど幅広い活動を展開している。





①プレゼンテーション「オーガニックなまちづくりについて」

今、何をすべきなのか。一人ひとりが考え、主体的に行動する。それがオーガニック。

木更津市は、「オーガニックなまちづくり」を定義づけ、新たなまちづくりに取り組んでいます。

「オーガニックなまちづくり」とは、どんなまちづくりなのか。木更津市小河原企画部長が講演しました。

一、オーガニックとは

一般的にオーガニックは有機農業といった意味で使われていますが、木更津市はオーガニックを新たなまちづくりの共通理念として、「オーガニック」を「地域、社会、環境等に配慮し、主体的に行動する考え方」と捉え、「オーガニックなまちづくり」を「人と自然が調和した持続可能なまちとして、次世代に継承する取組」として、定義づけを行いました。

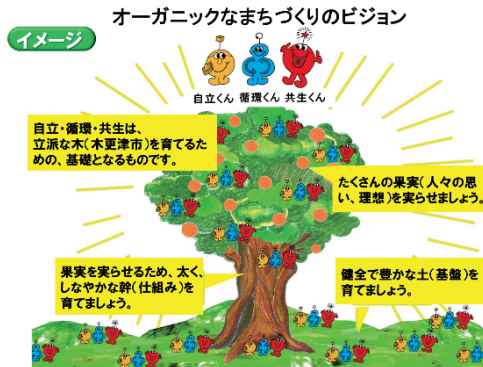
二、オーガニックなまちづくりに必要な三つの要素と三つの視点

三つの要素は、①地域を愛し、自らの手で未来を選択・創造する人。②豊かな地域資源をより良く循環させ、新たな価値を生み出していく健全な基盤。③有機的な繋がりがや多面的な活動により、個々の思いや理想を実現できる仕組みになります。また、各要素を形成するため、①自立、②循環、③共生という三つの視点を持って取り組んでいきます。

木に例えると、人は果実、基盤は健全で豊かな肥沃な

土地、仕組みは太くしなやかな幹になります。

そこに三つの視点、自立、循環、共生というのは、微生物に例え、微生物が色々な場所活躍し、それぞれを醸成していくように例えました。



三、具体的な取組

オーガニックなまちづくりの方向は大きく分けて3つあります。

はじめに、「人を育む」ことです。そのための具体的な取組の一つ目は、サポーター制度です。登録制度をとり、オーガニックに相応しい活動をしている方、又はしようとしていらっしゃる方とのネットワークを作り、色々な情報共有ができる場を構築します。

二つ目は、地域の担い手の育成です。市民活動をする方の相談窓口である市民活動支援センター「みらいラボ」、創業支援・産業支援を行う「らづサポ」を昨年設置しました。三つ目は、地域の歴史・文化の伝承です。地域に根ざしたものを次世代に繋げていく人材の育成も図っていきます。

次に、「持続可能なまちの基盤を整備することです。そのための具体的な取組の一つ目として、木更津市では、マラソン、トライアスロン大会などを開催し、健康づくりに力を入れています。ここでの二つ目は、顔の見える学校給食です。給食の残りである残渣を堆肥化、肥やしにし、野菜などを栽培し、採れた野菜を学校給食で使うものです。三つ目は、コンパクトシティです。木更津駅から富士見通りを活用し、木更津港の内港にある公園と連携するようなかたちで、回遊性のある空間にしていきたいです。最後に、「自立した地域社会の仕組みを構築することです。そのための具体的な取組の一つ目は、各公民館

単位のまちづくり協議会を設立し、地域自治の充実を図ります。二つ目は、働くママサポートです。母子手帳を電子化し、検診時期の案内、個別相談の対応など、支援ソフトに活用できます。三つ目は、海外ネットワーク関係です。昨年と今年、韓国でALGOAサミットが開催され、市長も参加しました。また、ボゴール市に訪問し、交流を深めました。

これまで理念等を説明してきましたが、三つの要素、三つの視点を踏まえ、今年度中にオーガニックなまちづくりに向けた行動計画であるアクションプランを策定し、持続可能なまちづくりを進めていきます。



木更津市 小河原茂之企画部長



②キックオフトークセッション「未来へつなぐために」



「オーガニック」を視点としたまちづくりを新たにスタートさせた木更津市。
この取組の実現には現状を良くしようと主体的に行動する、
市民をはじめ企業や団体等の支えが必要です。
市内の様々な分野において、ご活躍されているプレイヤーを招き、
「未来へつなぐために」をテーマに、トークセッションを行いました。

コーディネーター
・木更津市長 渡辺 芳邦
パネリスト(写真右から)
・特定非営利活動法人一粒舎
代表 飯田 喜代子氏
・農業生産法人株式会社耕す
マネージャー 豊増 洋右氏
・勝手に木更津応援団
代表 嶋田 一彦氏



(敬称略)

市長 本日は、「勝手に木更津応援団の嶋田さん」、「農業生産法人株式会社耕すの豊増さん」、「特定非営利活動法人一粒舎の飯田さん」の3名の方々に話を伺いたいと思います。

嶋田 勝手に木更津応援団の主な活動内容は3つになります。「木更津あかり祭夜灯」、「子育て支援活動 ココカラおやかカフェ」、「絵本回収プロジェクト」です。
木更津あかり祭については、今年度は五千個の灯籠

で木更津の街なかを灯しました。

続いて、ココカラということで、木更津市は県外から引っ越して来られるママが多く、そういった方の繋がりが広がるようにということ交流活动を行っています。

次に、絵本の回収活動です。捨てるに捨てられない絵本を回収して、幼稚園、保育園に寄附する活動です。

その他活動としては、干潟のクリーン作戦、ホテル鑑賞会、田植えイベントなども行っています。

勝手に木更津応援団は、市が掲げるオーガニックと関連付けて、他にはないものを魅力的に見せ、たくさんの方が来るようなイベントをやりたいと思っています。ボランティア団体だけでは、できることが限られているので、行政と協力しながら今後も活動したいと思っています。

市長 中心となるメンバーは、どのくらいの世代になるのですか。

嶋田 四十代が中心です。

市長 地域や規制の概念に縛られない活動で、皆さま注目していると思います。登壇者の方から質問があればお願いします。

豊増 夜灯を拝見し、今年は活動が広がったと感じました。活動が広がったきっかけは、どういう風に考えていますか。

嶋田 地道に続けた結果であり、情報発信をどう行うかが大切だと思います。

市長 現在、フェイスブックのレビューはどの位ですか。

嶋田 目標は二千を掲げており、直近だと千五百程度です。

飯田 今後、木更津を良くするためのポイントはなんですか。

嶋田 行政との協力や他の団体と有機的に結び付いて、皆で活動していくことがポイントだと思います。



すっかり秋の木更津の風物詩となった木更津あかり祭～夜灯～
木更津市内の約9割の幼稚園保育園の子供たちが灯籠を描く2016年の夜灯は、総数5000個もの明かりが木更津の街を暖かく照らしました。

市長 ありがとうございます。次に、豊増さんお願いします。

豊増 耕す木更津農場の面積は約30haあり、年間で有機野菜を約六十t、平飼卵を約十八t生産し、出荷しています。主要な設備は、ビニールハウス九棟、鶏舎二棟、堆肥舎、育苗ハウス、冷蔵貯蔵庫、自家発電所があります。

有機栽培の方法は、例えば大根の葉が栽培を助けてくれる存在として、適度に生えたままにしています。こうすることで程良い日陰が通路にでき、列と列の間に微生物が暮らして野菜の養分を作ってくれます。

鶏の飼育は、鶏が自由に鶏小屋の中を走れるようにして、鶏のストレスが無いようにしています。また、エネルギー循環のようなことも行い、社員食堂から出る廃食油をトラクターの燃料、うどんスープ製造企業から出る鰹節粕を鶏の餌に利用しています。

そして、オーガニック・スクールも行っており、有機野菜栽培を勉強したい方、農家

になるために修行をしたい方、飲食関係の仕事をしている都合で、野菜栽培を勉強しておきたい方などのために、野菜栽培を学ぶ機会を作っています。

我々が大切にしていることは、良し悪しがある考え方はしないようにしています。悪い土だから使わないではなく、育てていくという考え方をしています。育てる過程においてその土にあつたものを作付けしていけば、その都度、質の高い物ができるといえるのは、実はオーガニックの世界であります。

耕す木更津農場が考えるオーガニックは、四つの循環と呼んでいます。「資源、エネルギー、経済、人」、この四つの循環が整合性をもって機能し合う、そんな循環を成立させるのがオーガニックだと思っています。

市長 耕すさんでは様々な計画があると思いますが、ここで紹介しただけならと思います。

豊増 この循環をわかりやすく伝えられる場所として、オーガニックテーマパークのようなものを考えてい

ます。地元産食材を使ったレストラン、自然、環境を勉強できるセミナーハウス、農業体験ができる宿泊施設を導入していきたい、多くの方に利用していただきたいと考えています。

飯田 農業の魅力を若い方に持ってもらうには、何が必要か。そして、これから有機農業に参入したいと思っ

ている後輩の方々に、アドバイスがありましたらお聞きしたいです。

豊増 若い方々に対する魅力は、スケール、規模感が一番だと思います。収益力があり、続けていけることを示すことが大事だと思います。



津更木耕す農場は、育つ環境。「悪い土」と「良い土」があるんじゃない。豊増氏はこう話します。

有機農業を始めたいと思っ

ている若い方へのアドバイ

スに関しては、農業界だけを見ないで欲しいと思っ

市長 ありがとうございます。次に、飯田さんお願いします。

飯田 一粒舎の飯田喜代子です。一粒舎は、知的、精神の障害者二十人が働く福祉作業所であり、やっていることそのものがオーガニックだと思っています。

一粒舎設立のきっかけは、福祉作業所の平均工賃が低

かったところにあります。自分が働いた収入で暮らしていける工賃を支払える作業所を作れば、自立できるのではないか、一粒舎は三万円の工賃を目指してやってきました。一昨年から三万円を超える工賃が実現し、昨年は三万二千円になりました。千葉

県の平均工賃が一万三六六〇円ということで、平均より高い工賃が支払われています。

ここで、一粒舎の仕事を紹介します。竹を切り粉碎したものは、ブルーベリーのマルチに使っています。ブルーベリーは収穫が八月で終わり、九月上旬に収穫感謝祭を開催しています。

また、ここ三年は冬から春にかけて、里山の再生を行っ



津更木耕す農場で20年間有機野菜を栽培しています。年間約60t、平飼卵は約18tを出荷しています。

ております。木更津市協働のまちづくり事業というところで、助成金をいただいたものをガソリン代等にして、里山を綺麗にしています。

木更津の豊富な資源を活かしていくことが、大切だと考えています。これからの里山の計画は、花いっぱい山の山に作りかえることです。豊かな水が出ていますので、来年は水車をまわして、蕎麦の粉を作るみたいなのも考えています。また、竹を使って、里山で竹細工などを作ったりする体験も考えています。

私達は、農福連携ということで、農業と福祉の連携を実践しています。農業は人手不足で、遊休農地、耕作放棄地などはたくさんあります。逆に福祉の方は仕事を探しています。農業と福祉が連携し、それぞれのメリットが生まれば環境も良くなり、収入に繋がりが生かぎに繋がる、そんなことを考えています。しかし、高齢者支援、障害者支援、それだけではいけないと思っています。それぞれができることはないかと、障害者であっても高齢者であ

ってもできることはたくさんあります。そういうところを、これからもっと探していかなくはないかと思っています。

具体的な行動としては、来年の秋にオープンする道の駅での連携や、六次産業化をもっと進めていきたいと思っています。道の駅に来られたお客様が、里山、ブルーベリー園の方に足を伸ばしていただく。また逆に、里山、ブルーベリー園から、道の駅の方にお客様を紹介するなど考えています。

また、里山を守ることが緊急の課題になっています。現在、多くの猿や猪が押し寄せきており、実を採られて収穫ゼロ、十年かけて大切に



荒れた里山

から

花いっぱいの里山へ



育てたブルーベリーの木が折られるなどの被害にあっています。こういう農村の環境を改善する仕組み、組織作りをしたいです。それには行政の協力が不可欠だと感じています。

それから、障害者の自立を目指すというところでは、障害者の方から納税者を作りたいと考えています。

また、地域の高齢者の働く場も作りたいと思います。その時に、縮小された保育園や、生徒数が減少した学校の給食室で使っていた調理器具などを貸し出す仕組みを作ってもらいたいです。それを貸出していただければ、色々な事業を起こしやすくなると思います。

市長 ありがとうございます。オーガニックについて、皆さまが思うこと。そして、これから行政に求めること。再度、皆さまに一言ずつお話を伺いたいと思います。

嶋田 「自分は何ができるのか」と考えている方が多いと思うので、そういった人の気持ちや行動を変えられるような仕組み作りを行いたいです。人と人の繋がりを有効に活用していったら、もっと良いまちになると思います。行政に求めることは、後ろから背中を押すようなバックアップ体制をお願いしたいです。

豊増 オーガニックをスポーツに例えるとサッカーだと思えます。一回笛がなれば、後は選手が臨機応変に対応し、試合が進んでいく、そんなサッカー選手のような感じで動ける市民、まちになっていけば良いと思います。自分の判断、責任で、周りを見ながら動けるような人間になりたいと思っています。行政に求めることは、審判みたいな存在で、これ以上やったら怪我をする、ルール違反の時には笛を吹く。そんな

関わり方で、行政と付き合い合いたいと思います。

飯田 オーガニックなまちは、障害者も高齢者も収入や仕事があり、暮らしていけるまち。また、助け合いがあり、皆が共生できるまちだと思っています。要望については、オーガニックなまちづくりにするのには、横断的に取り組む部署があれば良いと思います。



飯田氏

豊増氏

嶋田氏



「オーガニックなまちづくり」に関する思いや展望、また、これからの行政のあり方について、力強く話す渡辺市長。

市長 ありがとうございます。これまでで行政の考えるベースは、まず公平でした。公平の基準が時代で変わり、価値観が変わってくると公平でも対応できない。これからは倫理やエシカルなど、そんな価値観で判断するしかないと思っています。まちが元気になるというのは、色々な人が色々な思いを持てるまちであります。その思いを応援してくれる人もたくさんいて、最終的には思いが実現できるまちだと思います。持続できるまちだと思っています。是非、皆さまにはご活躍いただきたいと思えますし、会場の皆さまも、自ら一歩踏み出す、もしくは応援する。そんなかたちで皆さまが繋がっていただけたらと思っています。

最後に、「オーガニックは地域をポジティブにする」というフレーズは、まさにそれぞれの思い、繋がりというのが地方をポジティブにしていくものだと思います。それともう一つ、「GO ORGANIC!」というキャッチフレーズ。オーガニックをましようという合言葉です。

オーガニックは地域をポジティブにする

GO ORGANIC!

こんな合言葉を基に、木更津がさらに賑やかに楽しくなるように、皆さまと一緒に、このまちづくりを進めていきたいと思えますので、是非ともご理解をいただきたいと思えます。

● 嶋田 一彦 氏

勝手に木更津応援団 代表
木更津夜灯、絵本回収プロジェクト、親子の交流の場「ココカラ」の活動に主に取り組む。

● 豊増 洋右 氏

農業生産法人株式会社耕す マネージャー
現在、約20種類の有機野菜を栽培する。大規模な太陽光発電を行うなど、環境に配慮した活動を行う。

● 飯田 喜代子 氏

特定非営利活動法人一粒舎 代表
障がいのある方などが地域で安定した自立生活を維持していける社会基盤を作る。ブルーベリー園の運営や里山の保全など、農業、環境といった視点の取組を行う。



①特別講演「有機農業と非木材利用製品を支えるコミュニティー」



インドネシア共和国 環境林業省 Ilyas Asaad 大臣顧問

インドネシア共和国環境林業省の Ilyas Asaad 大臣顧問に
森林保全を通じたインドネシアの取組について、ご講演いただきました。



森林の保全によって



インドネシアでは、環境への配慮や経済的な背景から、森林の伐採による木材の確保とは別に、NTFPs (Non Timber Forest Products)、森林保全をすることで産まれる木材以外の多様な産物、いわゆる非木材利用製品の活用を推進している。インドネシアの主なNTFPsとして、木の根と共生することで育つ食用キノコ、木の枝にできる蜂の巣から収穫するハチミツ、一部の木の幹にできる樹脂から生産される伽羅が挙げられる。



食用キノコ



ハチミツ



伽羅

それぞれ、地元住民の収入源となっている。



Ilyas Asaad 大臣顧問



②基調講演「世界を引率するアジア」



IFOAMアジア Zhou Zejiang 理事長

ALGOA (Asian Local Governments for Organic Agriculture) の実行組織である
IFOAM アジア (国際有機農業運動連盟アジア) の Zhou Zejiang 理事長に
IFOAM 及び ALGOA の活動についてご講演いただきました。

国際有機農業運動連盟の略称で、国際NGO団体です。有機農業運動をそのすべての多様性において、リードし、結びつけ、支援することを使命に、一九七二年にパリ近郊で設立されました。

IFOAMとは

ALGOAとは
有機農業の発達及び推進に向けて、地方自治体と農業法人、農家個人とのネットワークを構築するとともに、アジアの有機農業化を百分にすることを目的に、実行組織 IFOAM アジアにより二〇一五年九月に韓国槐山郡で設立されました。



Zhou Zejiang 理事長



③アジア各国から地方自治体の「先進事例発表」



アジア各国の地方自治体で進めているオーガニックに関する事例について、
発表していただきました。

②フィリピン ドミンガ市

Mark Villarín Pacalioga 市長

貧困を乗り越えるオーガニックコミュニティー



ドミンガ市では、人口の約 8 割が農業に携っており、オーガニック文化を浸透させることで生活の質向上に成功しました。また、多くの家庭でコンポストや種子バンクの設置をしています。

①韓国 洪城郡 Jung Manchul 氏

洪城郡有機農業の現状と課題



洪城郡は合鴨農法の発祥地です。韓国では親環境農業や有機農業が非常に伸びています。今後は技術の支援強化や農産物のブランディングに力を入れていきます。

④ブータン タシヤンチェ県 Thuji Tshering 氏

2020 年、100%オーガニックを目指して



幸福度を上げるためには農と食はオーガニックである必要があります。2020 年までに国内全てをオーガニックにすべく 2005 年より有機農業を推進しています。

③インド ビオファーム Manoj Kumar Menon 氏

暮らしと開発が調和する新しいモデル



有機農業に取り組む農家の集合体であるビオファームを推進。住民が使えるコンポストの設置など、ファーム全体で循環を生む仕組みを構築しています。

⑥木更津市 鎌田哲也 経済部長

農によるオーガニックなまちづくり



地産地消の推進、就農支援・担い手育成、資源の域内循環、里山との共生等を通じて、農によるオーガニックなまちづくりを進めています。

⑤埼玉県小川町 霜里農場 金子友子・石川宗郎 氏

下里地区の取組～地域と支え合う美しい村～



日本初の有機の里として広く知られています。下里集落の農家全てが有機農業に転換し、その結果、農家が仕事に誇りを持つことで地域が美しく変わりました。



④アジア各国のサステイナブルな取組紹介 「リレートーク」



アジア各国の有機農業に関する状況やサステイナブルな取組について、発表していただきました。

Relay talk

10 minutes report about "sustainable" from Asian countries

- Mongolia-Ms. Onon Deriilaamyatav
- Sri Lanka-Mr. Presad
- China-Mr. He Yongqing
- Bangladesh-Mr. Tanveer Hossain
- Indonesia-Mr. Bima Arya (Mayor of Bogor city)

ALGOA Forum in Kisarazu

- 1 モンゴル Onon Deriilaamyatav 氏
- 2 スリランカ Presad Rathnayake 氏
- 3 中国 He Yongqing 氏
- 4 バングラデシュ Tanveer Hossain 氏
- 5 インドネシア Bima Arya Sugiarto ボゴール市長

一 モンゴル

モンゴルはGDPの二一七%が農業で占めており、農業が盛んです。畜産が八割、作物が二割ですが、小麦、じやがいもは食料自給率百%を達成しています。伝統的に有機農業が盛んな国でしたが、より多くの人々に関心を持つてもらうため、二〇〇九年からは「モンゴル有機運動プログラム」を開始し、国際的な有機農業の技術を地域にも伝えていく活動を行っています。



講演者 Onon Deriilaamyatav 氏

二 スリランカ

古来は灌漑農業により「東の穀倉地」と呼ばれ穀物が多く取れたほか、香辛料が豊富に取れ貿易が盛んに行われました。近年、プランテーション農業の生産が減少したことや農業の機械化による労働者の減少、環境の悪化を背景に、有機農業の考え方が広まってきました。一九

八〇年代初頭からNGOなどにより有機農業推進が行われてきましたが、今では国でも有機農業を推進する方針を示し、有害物質ゼロの考え方や、これまで化学的な肥料を農家に配布していたものを、奨励金に変えるなど国も動いています。



講演者 Presad Rathnayake 氏

三 中国

中国の西充では、国際的な有機農産物の生産拠点化に取り組んでいます。二〇一五年、西充の歳入の二一%が有機農業関連によるもので、有機農業の従事者は十万人を越えています。西充が有機農業を推進してきたことにより、①生活環境の大幅な向上。②生活飲用水が安全なものへ。③農産物が安全なものへ。④農家の収入が増え、幸福度が向上し、貧困が軽減された。⑤国内外から投資が行われ、町の収入が増加した。⑥観光産業や文化産業が発

達したなどの大きなメリットがありました。



講演者 He Yongqing 氏

四 バングラデシュ

バングラデシュでは、一九七八年に有機農業が紹介されてからは、NGOを中心に有機農業を広める活動が進められてきました。大量の化学農薬が使用されたことによる土壌の劣化や安全な食品へのニーズが高まる中、二〇一三年に国の政策に有機農業推進が組み込まれましたが、まだこれからの取組です。バングラデシュは現在、オーガニックに生産されたクルマエビの輸出が盛んで、世界の有機水産養殖生産量では上位に入ります。最近では農作物の種類が増えたり、有機肥料や生物農薬を製造する会社ができたり、消費者の健康志向の向上や外国市場の盛り上がりもあり、有機農業にとってチャンスが訪れていると感じています。



講演者 Tanveer Hossain 氏

五 インドネシア

ボゴール市は人口増加に伴い、伝統文化や自然を守りながらサステイナブルなまちを目指しています。温暖化対策も視野に入れ、公共交通の整備や歩道と自転車道の充実とともに、すべての人に排他的にならないまちづくりを進めています。緑豊かなオープンスペースを増やすための古い公園のリニューアル、街路樹の植樹と保全、新たに作られた建物は敷地の二十%を公共スペースとして提供するよう義務づけるなど、スマートシティとして、クリエイティブな取組を行っています。また、環境に配慮した食として、年間七十二tの有機米を生産しています。



講演者 Bima Arya Sugiarto 氏
(ボゴール市長)

イノベーションが始まる地方自治体ネットワークの可能性と役割～



地域の連携で築く持続可能な未来への可能性について、
オーガニックに関わる様々な立場のパネラーと
木更津市長がディスカッションしました。

ファシリテーター

・木更津市長 渡辺 芳邦

パネラー

・インドネシア共和国環境林業省 調査研究部
Maman Turjaman 氏 (ママン氏)

・ドミンガ市長 (LOAM 委員)
Mark Villarín Pacalioga 氏 (マーク氏)

・一般社団法人 オーガニックヴィレッジ
ジャパン 山口 タカ 氏

・オーガニック・エコ農と食のネットワーク
(NOAF 理事) 西辻 一真 氏

・いすみ市農林課 主査
鮫田 晋 氏

市長 まず、それぞれの団体の活動についてお伺いします。

(敬称略)

ママン 事例を話すと、インドネシアでは、香木の保全について、多くの自治体で苦慮しています。政府では、財政状況により金銭的援助ではなく、「知識という資源」を提供することで、各自治体に学習してもらい、香木の保全に役立ててもらっています。

マーク 有機農業を進める50以上の自治体の首長で構成されるLOAM(有機農業推進自治体首長連合)が結成されて、様々な情報交換を行っており、有機農業技術などの力強い支援を農家に行っています。

山口 本法人は平成二七年六月に発足し、今まで無かったオーガニックの業界紙「オーガニックヴィジョン」を平成二八年一月から発行しています。

二〇二〇年東京オリンピック開催にあたり、有機農産物などの持続可能で責任ある調達に注目しています。

西辻 NOAFは、農林水産省、生産者、流通業者、販売業者、大学等が集まって、平成二八年七月に設立された団体です。

日本では農業生産者が一九五万人いる中、有機農業者はわずか一万人であり、有機農地は全体の〇・四%ではないです。そこでNOAFでは、二〇一八年までに有機農地を1%にすることを目標にしています。平成二八年度は、有機農家と流通・販売業者をつなげるためのプラットフォームの構築に取り組んでいるところです。

鮫田 いすみ市では環境と経済の両立に向けたまちづくり「自然と共生する里づくり」に取り組んでいます。その一環として、有機米の収益性に着目し、二〇一三年か

ら有機稲作モデル事業を行っています。その研究の中で、有機稲作は単純に農薬を使用しないという趣旨ではなく、積極的に多様な生物の力を活かしながら行うことが必要であること、つまり多様な生物との共生が重要であることがわかりました。

また、いすみ市で生産された有機米を市内の学校給食に導入しています。目的としては、地域で取れる最も安全な食を子どもたちに届けたいということ、また、学校給食を通じて、子どもたちだけでなく地元の方への理解の促進を狙っています。ゆくゆくは学校給食全てをいすみ産の有機米で賄いたいと思っています。



学校給食から広がる共感を活かす
かしたブランド戦略として
売された有機米「いすみっ

市長 皆さまありがとうございます。有機農業の推進に向けた地方自治体の役割についてはどうお考えでしょうか。

山口 地方自治体が有機農業を行う農家のバックアップを行うことにより、有機農業の持続可能性が高まると考えております。

西辻 有機農業を推進することでは何を目的とするのか、いすみ市では有機米を給食に使うことで、いすみ市の将来である子どもにつなげています。このように目的意識を持つことが重要です。

また、地方自治体の役割では、農家への技術面でのバックアップや規制の緩和などが挙げられると思います。

鮫田 行政にできることは、農家と一緒に有機農業を実践するための道筋を立てることだと思っています。

市長 ありがとうございます。お話ありましたが、オーガニックの推進にあたり、学校給食が取り組みやすいテーマであり、大きなポイントだと改めて感じました。

本日、様々な有機農業を推進する自治体・団体等が集まり、情報交換を行うことができて、大変勉強になりました。今後もALGOAを含めて、色々とつながっていければと思います。

⑥「木更津オーガニックシティフェスティバル宣言」

木更津の未来を担う市内の高校生 2 人に今後の決意表明を英語で発表いただきました。

(※ここでは日本語訳を掲載しています)

木更津オーガニックシティフェスティバル宣言

平成 28 年 11 月 17 日

私たちは、西に富士山を眺め、東京湾と房総の山々に囲まれた自然豊かな環境の中で育ってきました。また、ここ木更津市は、古代から重要な拠点として栄え、近世からは「木更津船」を通じた江戸との交流により、港町として繁栄した歴史と文化のあるまちです。それらは、美しい地球と自然の恵みとともに、これまで支えてきた先人達の努力の積み重ねにより実現しているものでもあります。

一方、今日世界では、様々な分野で深刻かつ複雑な問題が発生しており、地球規模の気候変動や食料危機など、人類の持続可能性が危ぶまれています。

他方、わが国では、少子高齢化が急速に進み、地域社会を担う人材の不足、地域の繋がりも薄れ、価値観やライフスタイルの多様化など、まさに成長から成熟にかわるべき今、日本全体が持続可能な発展に向かって方向転換を迫られています。木更津市も例外ではなく、特に日中でも閑散とした駅前の商店街などの活性化は大きな課題です。

そのために、私ができることを探したいと思います。私達一人ひとりが、自分の住んでいる地域を見つめ直し、未来につなぐため、自分のできることは何か、と考えることが重要だと思います。私も、今回オーガニックシティフェスティバルに出展するために、仲間と議論し、本気で考えました。現在、アジアの国々はどんどん結びつきが強くなっています。農業に関しては EU の共通農業政策のように国で自給しきれなくても、域内で食料を自給していくという動きが実現するかもしれない。そんななかでも、各国々が抱えている問題をこのような場所で話し合い解決策を求める活動は素晴らしいと思っています。アジアの気候、文化にあわせた技術が開発され工業と同じくらい農業も発展していくことを望んでいます。

今回のように、世界中から集まった人達と議論できるという状況を考えると、環境倫理のキーワード「Think Globally、 Act Locally」という言葉がうかんできます。世界規模で考え、地球の事を振り返ることで、危機感を持つという意味です。私はまさに今回のオーガニックシティフェスティバルにぴったりの言葉だと思います。人口が増え、活気ができてきた木更津市も多くの問題を抱えていることがわかりました。そして私達ができることは、今ある問題にきちんと向きあうことです。

大切なことは、自分のこととして、関心を持つこと、きちんと、問題に向き合うこと、そして、それをメッセージとして、様々な場面で発信していくこと。

私達は、たくさんの人と繋がり、意見を交わし、支え合いながら、共に夢をかたり、責任を持って行動に移すことにより、素晴らしい未来を築くことを決意し、ここに宣言します。

千葉県立木更津高等学校 2 年 奥野巧、佐生浩季



「木更津市オーガニックシティフェスティバル 2016」を終えて

木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会

会長 渡辺 芳邦（木更津市長）

「木更津市オーガニックシティフェスティバル 2016」が、大勢の方々に支えられ、無事終了したことを心から御礼申し上げます。

フェスティバルは、日本初のオーガニックシティを標榜した木更津市のキックオフイベントとして、市民の皆さまをはじめ木更津市に関わる方々に、「オーガニックなまちづくり」への理解を深めていただき、ご自身の取組や他の取組に対するご支援等につなげていくことを趣旨として開催しました。

「オーガニックなまちづくり」については、平成 28 年 12 月に、「木更津市人と自然が調和した持続可能なまちづくりの推進に関する条例」、通称オーガニックなまちづくり条例を施行し、平成 29 年 3 月には、オーガニックなまちづくりの取組を効果的に実施していくための行動計画であるアクションプランを策定しました。

今後は、オーガニックなまちづくり条例の基本理念を体現するため、アクションプランに基づき、様々な施策を展開していきますので、なお一層のご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

「GO ORGANIC！」

協賛団体・後援・協力・協賛品一覧



(1) 協賛団体 (五十音順、全 16 団体)

(敬称略)

株式会社アツホンダ販賣	epm 不動産株式会社
医療法人社団鵬会 高名清養病院	関東自動車工業株式会社
株式会社協同建設	クレヨンハウス
興和建设株式会社	株式会社ジェイコム千葉 木更津局
信和産業株式会社	綜和熱学工業株式会社
株式会社茶三代一	株式会社ティーファームジャパン
株式会社富田屋商店	有限会社ナラモト印刷
日東珈琲株式会社 大阪支店	株式会社リオ

(2) 後援

駐日インドネシア共和国大使館	外務省
農林水産省	千葉県
一般社団法人オーガニックフォーラムジャパン	

(3) 協力

IFOAM ASIA (国際有機農業運動連盟アジア)

(4) 協賛品

○株式会社ジェイコム千葉 木更津局

ストレスリリーサー



フリクションボールペン



○株式会社リオ

燻製しょう油、燻製オリーブオイル



ご支援いただき、ありがとうございました。

木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会事務局

木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会構成



区分	団体等名
市	木更津市
市議会	木更津市議会
産業団体・企業	木更津商工会議所
	木更津市農業協同組合
	イオンモール株式会社 イオンモール木更津
	株式会社かずさアカデミアパーク
	株式会社新昭和
	新日鐵住金株式会社 君津製鐵所
	ソニーグローバルマニュファクチャリング& オペレーションズ株式会社 木更津サイト
	農業生産法人 株式会社耕す
教育機関	独立行政法人国立高等専門学校機構 木更津工業高等専門学校
	株式会社ジェイコム千葉 木更津局
メディア	特定非営利活動法人 木更CON
	一般社団法人かずさ青年会議所
各種団体	きさらづアグリフーズ推進協議会
	木更津市観光協会
	木更津市国際交流協会
	木更津市商店会連合会
	広域交流市民の会

- ※ 会 長：木更津市長 渡辺 芳邦
 副会長：木更津商工会議所会頭 鈴木 克己
 監 事：木更津市副市長 久良知 篤史
 監 事：木更津市観光協会会長 野口 義信

GO ORGANIC !

木更津市オーガニックシティフェスティバル 2016 レポート

平成 29 年 3 月

「木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会」事務局

〒292-8501 木更津市富士見一丁目 2 番 1 号

木更津市役所駅前庁舎 企画部企画課内

電話 : 0438-23-7425

FAX : 0438-23-9338

e-mail : info@k-organiccity.org

<http://www.k-organiccity.org/>